

大韓民国 濟州島考古紀行

An Archaeological Tour on Cheju Island, the Republic of Korea

岸本 義彦

Kishimoto Yoshihiko

ABSTRACT: As a part of the first academic and personnel exchange program between Okinawa Prefectural Center of Buried Cultural Property and the Cheju National Museum of Korea, the special exhibition of Maritime Cultural Exchange titled 'Discovery of Prehistoric Lives -Shell Artifacts of Okinawa-' was held at the Cheju National Museum from October 10 to November 27, 2005. Over 400 archaeological artifacts were collected from various institutes in Okinawa and were introduced in the exhibition, which was favorably received. This paper reports about the process of the exchange program, and introduces the sites and archaeological materials of Cheju Island as well, making some comparisons of prehistoric cultures between Okinawa and Cheju Island.

はじめに

平成16（2004）年10月25日、大韓民国国立濟州博物館の具一會館長と張斎根学芸研究士が来所され、当センターとの学術及び人的交流を推進していきたい旨の要請と、2005年に予定している海洋文物交流特別展への協力依頼があり、当時の安里嗣淳所長が快諾の意を表し、盛本勲調査課長が涉外担当となり、国立濟州博物館との交流が始まった。

当センターが平成12（2000）年に開設して以来、公的には初めて海外の関係機関と交流を持てたことは非常に意義深いことから、今後の参考のために、事のいきさつを記録に留める。

また、濟州島で実際に見聞したことを考古学の立場から紹介する。

海洋文物交流特別展に至るまでの経緯

平成16（2004）年11月28日から12月15日までの期間、張斎根氏・李真収氏・姜京姫氏・韓知潤氏ら4名が来沖し、当センターや県立博物館、沖縄国際大学考古学研究室、沖縄国際大学南島文化研究所や浦添市教育委員会、具志川市（現うるま市）教育委員会、北谷町教育委員会、読谷村立歴史民俗資料館などに出向き、精力的に考古資料等の調査を実施した。

年度が明けた平成17（2005）年4月には、当センターの所長及び調査課長が代わり、濟州博物館との涉外担当も必然的にわたしに引き継がれた。

4月8日から15日までの日程で張斎根氏と李真収氏、姜京姫氏が来所し、4月1日付で赴任した田場清志所長に表敬あいさつを行った後、これまでのいきさつを説明した。当センターとしても全面的に協力をすることを約定した上で、10月10日開幕予定の海洋文物交流特別展の展示企画（草案）をもとに今後の作業及び日程等について話し合った。その後、借用予定遺物リストに沿って遺物の確認を当センター及び関係機関で実施した。また、埋蔵文化財貸借協約書（案）についても双方で検討を重ねてか

ら取り交わすことになった。

5月17日付けで埋蔵文化財貸借協約書を締結し、国立済州博物館への貸借遺物搬出（8月15日）に向けて、諸事務手続き等を順調に行ってきました。ところが、貝製品を主体とした貸し出し資料の中に、ワシントン条約附属書Ⅱに掲げられているシャコガイ（製品）が37点含まれていることから、輸出貿易管理例第2条第1項第1号の規定に基づいて経済産業大臣の輸出承認を受けなければ貸し出しができないことがわかった。考古資料がワシントン条約の規制を受けるということは想定外のことでの、多少のとまどいを感じながら県の農林水産部や沖縄総合事務局、経済産業省などに問い合わせた結果、直接の担当部署は経済産業省貿易経済協力局貿易管理部貿易審査課であることが判明し、申請の方法について担当官と調整を進めていった。

初めてのケースであったことから、経済産業省のホームページを参考にしながら書類作成を行ったが、担当官と調整するなかで添付資料が二転三転し、実際に提出するまで3週間の日程を費やした。また、経済産業省の承認を得るまで1ヶ月もかかり、そのため、シャコガイ製品については他の貸し出し資料の搬出より1ヶ月遅れて搬出にこぎつけた。

後で聞いた話であるが、経済産業省でも考古資料を扱うのは初めてで、合議先の農林水産省でも化石ということで取り扱うことになったようである。

以上のいきさつがあったが、約400点にもおよぶ貸し出し資料については無事に搬出することができた。ちなみに、当センター以外の機関から貸し出す考古資料についても、当センターに集約してから一緒に搬出した。

搬出の際は、国立済州博物館の張斎根氏とわたしが立会い、韓国と沖縄の運送会社のスタッフが梱包作業を行った。

8月19日、那覇空港から搬出する日に運送時護送官として、わたしも張斎根氏と共に那覇空港を発ち、済州島へと向かった。済州島では国立済州博物館に赴き具一會館長に表敬あいさつし、夕方に鹿児島県からの護送官肘岡隆夫氏と合流した。

8月20日・21日は博物館が休館のため、張氏と李氏の案内で島内の高山里遺跡・郭支遺跡・支石墓などを見学した。翌22日は朝から搬入した資料の開梱作業と検分を行い、無事に護送官としての任務を終えた。

帰任後は特別展開催に向けての図録作成などの細部調整を行い、10月10日の開会を迎えた。当日の式典には当センター所長（代理：赤嶺正幸副所長）が招聘され、祝辞を述べた。また、10月13日には前所長の安里嗣淳氏が「沖縄先史時代の貝文化」というテーマで記念講演を行い、済州島の人たちに沖縄の貝文化を紹介した。

11月27日までの特別展では多くの参観者があり、沖縄の歴史・文化について済州島の方たちに知つていただく良い機会となったようである。

12月7日の資料返却時には具一會館長と張斎根学芸研究士が来所し、無事に返却業務が完了した。税関での諸手続きもスムースにでき、貸し出しの際の煩雑さはなかった。

済州島の遺跡と遺物

ここでは済州島で見聞した主な遺跡と出土遺物を紹介し、沖縄との関わりについて述べることにする。

初めて降り立った済州島は、沖縄と同じ島国でも地形や自然環境がまったく異なる印象を受けた。火山島からなっており、最高所のハルラ山（標高1,950m）を中心に1,000m以上の山々が島の中央に

聳えている。島の南西部に広大な火山灰台地が認められるぐらいで、平野部は少ない。海岸線は大半が火山岩（玄武岩）から成っており、一部に石英砂からなる砂浜があるが、サンゴ礁は形成されていない。海の状況が沖縄と違うことから遺跡の立地状況が皆目検討つかなかったが、遺跡を見学して初めて実感できた。

1. 高山里遺跡

北済州郡翰京面高山里に所在し、一帯は「ハンジャン原」と呼ばれる海拔14~17mの広大で平坦な台地になっており、海岸近くに遺跡が形成されている。発掘調査によって「高山里式土器」と呼ばれ

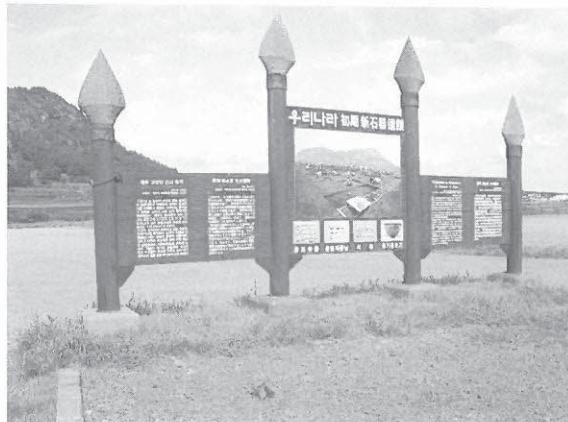


写真1 高山里遺跡



写真2 隆起文土器

る原始無文土器や隆起文土器とともに石鏸や尖頭器などの石器が数多く出土している。現在は国指定の史跡に保存され、史跡公園として活用されている（写真1）。

写真2に示した土器は、口縁部に3条の隆起文をめぐらす浅鉢形をなし、九州の縄文時代草創期に属する隆起文土器に類似している。ただ、沖縄では現在のところ隆起文土器は確認されていない。

2. 上摹里遺跡

南済州郡大静邑上摹里サンイス洞の海岸近くに所在し、約1万坪余りの範囲にわたって遺物散布地と貝塚が確認されている。1988年に発掘調査が行われ、円形炉址1基と住居址とみられる遺構が検出されている。出土遺物は土器（孔列土器・赤色磨研土器など）を中心として磨製石斧、石ノミ、石鏸、叩き石などの石器類、骨針、貝釧などがある。遺物のセット関係は九州の弥生時代前期に類似している。時期的にも紀元前6世紀を越えないと考えられている。



写真3 孔列土器

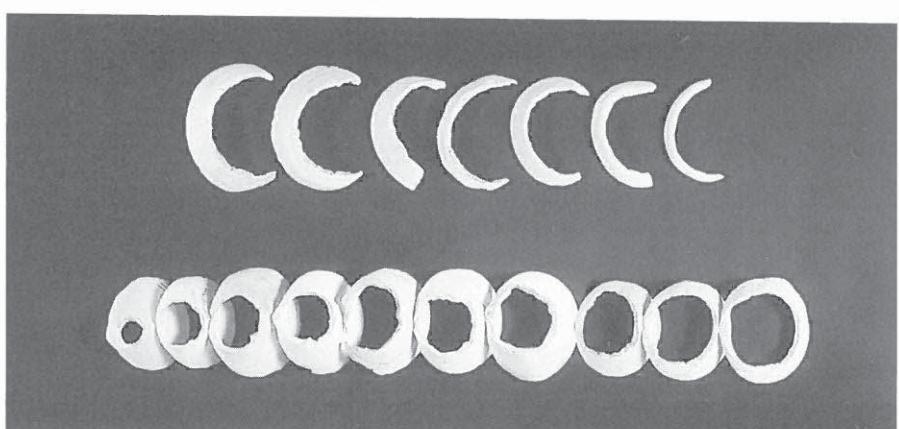


写真4 貝釧（貝輪）

写真3は孔列土器と呼ばれるもので、口縁に一列の円孔をめぐらし、口唇と肩部に刻文を施した甕形土器である。この種の土器は九州においても出土例が多く、沖縄でも宜野湾市の宇地泊兼久原遺跡で見つかっており、彼我の関係がうかがわれる。写真4はベンケイガイ製の貝釧（貝輪）で、韓半島南東部の釜山市東三洞遺跡からも大量に出土している。沖縄ではベンケイガイが生息していないこともあり、別の二枚貝でつくった貝輪が縄文期にみられる。

3. 金寧里ケネギ洞窟遺跡

北濟州郡舊左邑金寧里に所在し、通称「ケネギ洞窟」と呼ばれる溶岩洞窟の入り口に形成された遺跡である。一帯は海拔17~20mの平坦な地形をなし、海岸からは直線にして1kmほど離れている。1991年から93年にかけて発掘調査が3回行われ、黒色磨研土器や把手付土器などの土器類、石鎌、石のみ、砥石、石棒などの石器類、鉄器類、骨角器、貝鏡など比較的多くの遺物が出土している。遺跡の主体時期は郭支里式土器の段階で3~5世紀頃に位置づけられている。九州の弥生時代後期から古墳時代に相当する。また、沖縄の貝塚時代後期中葉に属する。

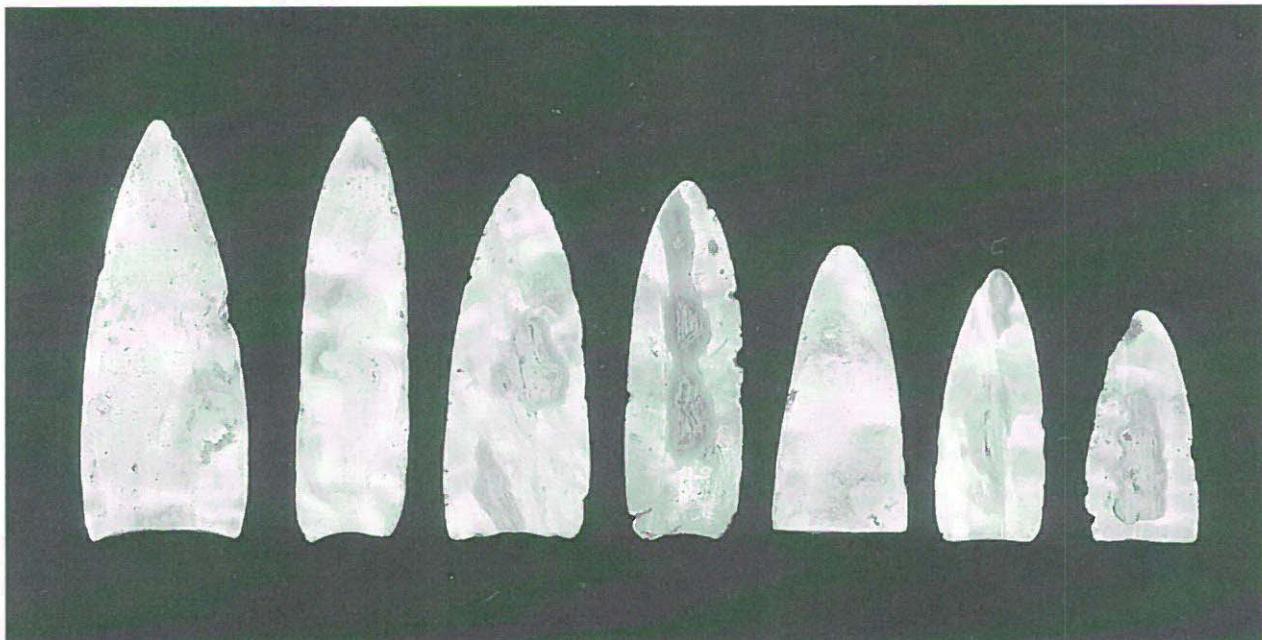


写真5 貝鏡

写真5はアワビ貝を用いた貝鏡で、磨製石鏡を模倣してつくられたものと考えられ、いわゆる材質転換されたものである。沖縄では磨製石鏡の出土自体も少なく、この時期の貝鏡も皆無の状態である。ただ、貝塚時代前期にはクロチョウガイを用いた貝鏡が確認されており、貝殻を素材として道具をつくるという文化があったことは確かである。

4. 郭支貝塚

北濟州郡エウォル邑郭支里に所在する貝塚遺跡で、海拔20~30mの緩やかな平坦面に形成されている。1979年から1992年まで7地点で5回にわたる発掘調査が行われた。その結果、1m以上に及ぶ遺物包含層が確認され、最下層は青銅器時代（九州の弥生時代前期相当）の文化層、中層は耽羅時代形成期の文化層、上層は高麗・朝鮮時代の文化層から形成され、濟州島古代文化の流れを知るうえで重要な複合遺跡となっている。

出土遺物も各層から土器や石器、鉄器、骨角器、装身具、貝類、獸魚骨など多種多様にわたっている。写真6はアワビ貝を用いた貝刀（貝包丁）で、石包丁を模して製作したものと考えられる。九州でも弥生時代の遺跡から貝包丁が見つかっており、稻の穂摘み具として利用されたことがうかがえる。沖縄では、この時期に稻作文化が伝わった証左がなく、貝包丁も確認されていない。

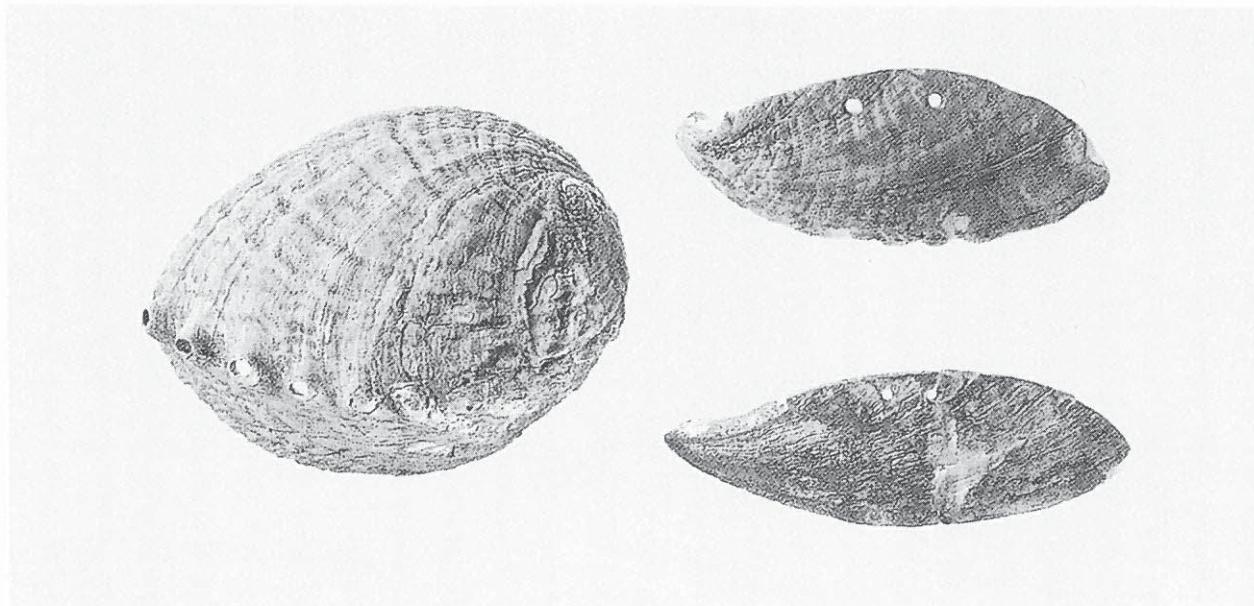


写真6 貝刀（貝包丁）

写真7はマツバガイの一端に2個の小孔を穿った製品で、装身具と考えられている。沖縄での出土例はないが、山口県の土井ヶ浜遺跡で出土しており、濟州島との関係がうかがえる資料となっている。

おわりに

以上、国立済州博物館で開催された海洋文物交流特別展「先史時代 生活の発見—沖縄の貝製品—」の関わりの中で、当センターが初めて海外の機関に考古資料を貸し出しするまでのいきさつや、運送時護送官として済州島に赴き、現地で見聞した遺跡や遺物について紹介した。

考古学的見地から済州島と沖縄の先史文化を比較した場合、直接的なつながりが見えないということが言える。済州島の先史文化は基本的には韓半島からの流入であり、沖縄は九州からの文化流入が知られている。九州を介して間接的な先史文化の関わりはあったと思われるが、まだ確たる証左は得られていない。今後はより詳細な比較研究を行い、彼我の関係を明らかにする必要がある。

末尾ながら、済州島で過分な世話をいただき、また資料紹介の機会を与えてくださった国立済州博物館の具一會館長をはじめ、張斎根学芸研究士、李眞旼学芸研究士ほか関係各位に深謝の意を表する次第である。

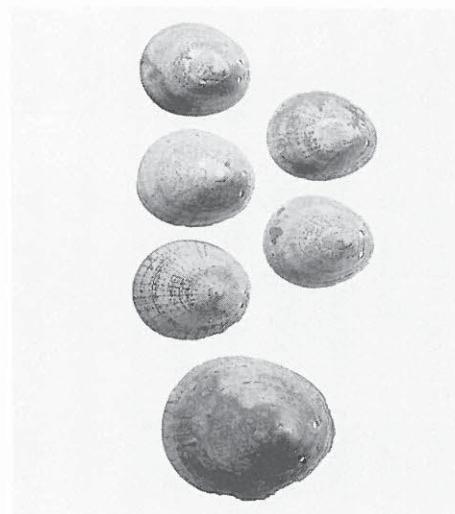


写真7 垂飾品

(きしもとよしひこ：調査課課長)